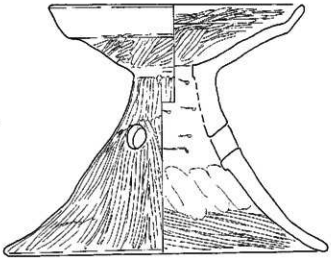
和島村埋蔵文化財調査報告書第10集

奈良崎遺跡

ー県営圃場整備事業（桐島桐原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書ー



2001

新潟県和島村教育委員会

序

和島村では現在、県営圃場整備事業が行われ新たな農業基盤の建設が進められています。

奈良崎遺跡は桐島桐原地区の県営圃場整備事業に伴い、記録保存の目的で発掘調査が行われました。現在、奈良崎遺跡周辺は山林と水田に利用されています。調査の結果、さまざまな遺物が出土しました。時代は、弥生・古墳時代・平安時代・中世と複数の時期にまたがるということです。特に弥生・古墳時代の遺物は比較的多く出土し、その中でも農耕具の鋤は古墳時代前期のものと思われ、約1700年も前から農耕が行われていたことになり貴重な資料といえるでしょう。

新世紀を迎えさらなる発展を図るのと同時に、常に歴史を見つめ直し将来に生かすという作業は不可欠でありましょう。このような資料と本書がそのきっかけとなり、少しでも埋蔵文化財の保存・活用のための一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘作業にあたりご協力いただいた地元作業員の皆様、ならびに本書作成にいたるまでお世話になった長岡農地事務所、関係諸機関に深い感謝の意を表します。

和島村教育委員会
教育長　下　村　孝　一

例　言

1　本書は、新潟県三島郡和島村大字島崎字奈良崎に所在する奈良崎遺跡の発掘調査報告書である。

2　奈良崎遺跡発掘調査は新潟県長岡農地事務所所管の県営圃場整備事業に伴い、平成12年度に和島村教育委員会が受託して実施したものである。経費負担は農地部局が9割、村文化財保護部局の1割は国庫及び県費の補助金交付を受けた。

3　グリッド杭の打設・ラジコンヘリコプターによる空中写真測量は朝日航洋株式会社に委託した。

4　調査体制は以下のとおりである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村　孝一
事務局	〃	事務局長	藤井　賢計
調査担当	〃	主事	丸山　一昭

5　調査面積は水路設置部分の約500㎡である。

6　遺物の注記は「奈水」とし、ほかに調査区名・層位を記した。

7　発掘作業参加者　早川徳一　羽入正敏　横尾謙二　藤井高治　関本昭二郎　早川正稔　小林正次　早川信次　本間ノリ子　本間ハツ　藤井静江　家合正子　栗林チヨ　北島竹乃　北島ケヨノ　小室イツ　早川イエ子　池内ハツイ

8　整理作業参加者　小田富美子　久住幸江　近藤保　関川たづ子　高橋智子　早川雅子　山口八千代

9　本書の記述・編集は丸山一昭が担当した。

10　本遺跡の出土資料・記録資料などは和島村教育委員会で一括保管している。

11　本報告書作成までに地元の方々を始め以下の機関にさまざまなご協力をいただいた。厚く御礼申し上げる。

長岡農地事務所　新潟県教育庁文化行政課　石川県立埋蔵文化財センター

目　次

序

例　言

第1章　遺跡の位置と環境
1．遺跡の位置 …… 1
2．地理的環境 …… 1
3．歴史的環境 …… 3

第2章　調査概要
1．調査に至る経緯 …… 5
2．調査の経過 …… 5
3．調査の方法 …… 5

第3章　調査の成果
1．基本層序 …… 7
2．遺　　物 …… 8

第4章　まとめ
1．土器分類 …… 15
2．土器の年代 …… 16
3．遺跡の性格 …… 17

参考文献 …… 19

挿図・図版目次

第1図　遺跡の位置

第2図　周辺の遺跡

第3図　グリッド設定図

第4図　土層柱状図

表　目　次

遺物観察表

図　版　目　次

実測図

図版1　遺跡平面図（1）

図版2　遺跡平面図（2）

図版3　Ⅰ区出土土器実測図（1）

図版4　Ⅰ区出土土器実測図（2）

図版5　Ⅰ区出土土器実測図（3）

図版6　Ⅱ区出土土器実測図（1）

図版7　Ⅱ区出土土器実測図（2）

図版8　Ⅱ区出土土器実測図（3）

図版9　古代・中世の土器・木製品

図版10　石製品・羽口実測図

写真図版

図版11　空中写真・Ⅰ区完掘状況

図版12　発掘風景・下駄・鋤出土状況

図版13　Ⅰ区土層断面・Ⅲ区完掘状況

図版14　Ⅱ区完掘状況・土層断面

図版15　Ⅱ区遺物出土状況

図版16　Ⅰ区遺物写真（1）

図版17　Ⅰ区遺物写真（2）

図版18　Ⅰ区遺物写真（3）

図版19　Ⅱ区遺物写真（1）

図版20　Ⅱ区遺物写真（2）

図版21　遺物写真（その他）

第１章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

奈良崎遺跡は新潟県三島郡和島村大字島崎に所在する。和島村は新潟県海岸部のほぼ中央に位置している。近隣には出雲崎町・寺泊町などの港町や長岡市・三島町・与板町といった都市郊外が接している。

遺跡は村の北部、寺泊町との境界付近に位置し、島崎川を南方に望む標高約40ｍほどの丘陵部とその周辺に広がっている。現況は山林・畑地・休耕田である。

２．地理的環境

和島村周辺の地形は大局的に見ると、東西の低丘陵地帯とその間の沖積平野に大別される。これらの地形は「新潟方向」と呼ばれる褶曲軸が南南西－北北東の方向性を持って連なり、新潟県中越地方から下越地方にみられる。これは地層が圧力を受けたときにできる「鍵」の向きと言え、盛り上がった部分は丘陵となり、沈み込んだ部分は谷を形成する。この起伏が河川や洪積台地を形成する上で大きな要因になったと考えられる。

東西丘陵で確認された地層に含まれる貝化石・珪藻化石・火山灰などから、地層が形成された時代や環境が明らかになってきている。第三紀鮮新世の頃は海中に没していたが（西山層）、褶曲運動と土砂の堆積により第四紀更新世前期～中期には浅い海となり（灰爪層）、その後次第に内湾、潟へと変化した（魚沼層）様子が確認できる。

奈良崎遺跡周辺から島崎集落にかけて立地する平坦な台地は洪積台地と呼ばれ、更新世において川の氾濫原として堆積した地層が浸食基準面の低下によって台地状に残ったものと考えられる。その後の沖積世においても河川の洪水と土砂の堆積作用が継続された結果、沖積低地が形成され現在にいたっている。

第１図　遺跡の位置

1 横滝山廃寺
2 大久保古墳群
3 赤坂遺跡群
4 上桐神社裏
5 松ノ脇
6 門前
7 夏戸城跡
8 大武
9 島崎城跡
10 奈良崎
11 銚ヶ入南
12 大塚
13 山田郷内
14 八幡林
15 下ノ西
16 旧北辰中学校瓦窯跡
17 下小島谷古墳群
18 十二

第2図　周辺の遺跡

3．歴史的環境

和島村では西側丘陵と島崎川流域の沖積平野を中心に発掘調査が行われてきており、時代ごとにある程度の様相が明らかになってきている。奈良崎遺跡は平成11年度までに数回に渡り発掘調査が行われ、弥生時代終末～古墳時代前期の円形周溝墓や前方後方形墳墓、銅鏡が出土した古墳などのほか、井戸や建物群を伴う中世の山城跡が検出された。近接する大武遺跡は、埋没した谷から縄文時代前期前葉・中期前葉～中葉・後期中葉・晩期前葉～中葉・弥生時代終末～古墳時代初頭・後期（6世紀）・古代（9～10世紀）・中世（13～16世紀）の遺物が層位的に出土した。縄文時代前期～中期ではクルミ貯蔵穴が検出されたが、谷がある程度埋没した弥生時代終末以降は水田に利用されたと考えられ、木製農具が出土したほか用水路、杭跡が検出されている。

姥ヶ入南遺跡では、弥生時代終末の墳墓が検出され副葬品には鉄剣が埋葬されていた。東側丘陵では松ノ脇遺跡で発掘調査が行われ、弥生時代中期後半の櫛描文土器が出土している。出土土器は北陸系・東北系・信州系に大別することができ、この地域が各地方の接点であったと考えられる。これより北、標高約90ｍの丘陵には赤坂遺跡がある。表面採集により弥生時代後期の遺跡とされ、林道の断面には竪穴住居跡や深さ２ｍ以上の環濠が観察されている。周囲には、上桐神社裏遺跡など弥生時代後期頃の高地性集落が点在し、相互に関連性をもって存在したと考えられる。

古墳時代では初頭～前期に位置付けられる遺跡が多く、それ以降のものははっきりしない。八幡林遺跡では竪穴住居が１棟検出されており、近隣の山田郷内遺跡でも遺物が出土している。ドノ西遺跡南方の下小島谷古墳群では全長10～20mほどの小型の前方後方墳が３基確認されている。寺泊町町軽井の大久保古墳群でも同様の前方後方墳が２基確認されている。巻町山谷古墳や三条市三王山古墳群のものに比べて小規模な前方後方墳が、どのような位置付けがなされるかは今後の課題である。その他に門新遺跡の旧河道でも遺物が出土しているが、これらの遺跡は古代以降に再び営まれるものが多く沖積地に進出していく過程がうかがえる。

７世紀初め現在の北陸地方は越国と呼ばれていた。佐渡を除く当時の新潟県地域は７世紀終末の持統朝（692年ころ）までは越中国であったが、大宝二（702）年、越中国四郡（頚城・古志・魚沼・蒲原）が越後国に帰属し、和銅五（712）年に出羽国が分立して範囲が確定した。９世紀前半には古志郡から三嶋郡が分割され、前述の四郡と三嶋・沼垂・岩船の７郡が越後国に属していた。

島崎川流域は古代遺跡が集中している地域で、集落跡・窯跡・製鉄跡・製塩遺跡のほか、官衙関連遺跡が注目される。寺泊町竹森には横滝山廃寺があり、越後の古代初期寺院として著名である。和島村には延喜式（延長５・927年成立）に記載された式内社に比定される桐原石部神社・宇奈具志神社があり、10世紀には既に存在したことになる。八幡林遺跡では四面庇付建物・掘建柱建物群や多量の墨書土器・木簡が出土している。特に古志郡衙の可能性を示す「郡」・「大領」・「大厨」、駅家の存在を示す「大家驛」の墨書土器や、「沼垂城」・「郡司符」木簡は重要な文字資料として注目される。島崎川の微高地に立地する下ノ西遺跡でも多量の木簡が出土し、計画的に建設された大型掘建柱建物群や道路状遺構などが検出され、より官衙的な要素をもつ遺跡である。両遺跡は1.5kmの距離にあり、また近接して旧北辰中学校瓦窯跡も存在することからそれぞれが関連をもって機能したと思われる。沖積地の北部にある門新遺跡では10世紀前半に溝や柵で区画された外郭施設と船着場を持ち、主屋の庇付建物を中心とした建物群が検出された。主屋の雨落溝からは漆紙文書が検出され、「延長六年」（928）の年紀をもつものが注目される。門新遺跡は律令制崩壊による郡衙解体後に独自の私的経済活動と土地開発を行った開発領主層の拠点と考え

られる。

中世の遺跡では大武遺跡・奈良崎遺跡のほか発掘調査例は少ないが、居館跡や山城跡・鍛冶工房跡・製鉄関連遺跡・塚などが確認されている。山城跡は特に多く発見されており、東西の丘陵に分布する。北北西約2kmには県指定史跡の夏戸城がある。館跡の確認例は少なく山城とセット関係を確認できる遺跡は北野城と入り館など3箇所である。

奈良崎遺跡は以前から「島崎城郭」と考えられており、南北朝時代の「色部高長軍忠状案」（建武三年・1336年）によると南朝方の小木・風間・河内・池氏らが立てこもる島崎城が、北朝方の色部氏によって攻め落とされたとある。発掘調査の結果、大型の溝・掘建柱建物や井戸跡・土抗が検出され城郭の存在する可能性が高まった。

遺跡周辺の空中写真（国土地理院　昭和37年撮影）

第２章　調査概要

１．調査に至る経緯

平成12年度、桐島地区において県営圃場整備事業が行われることになり、奈良崎遺跡周辺も対象範囲となった。調査範囲のうち水路施工部分は深さ約1.4mまで掘削が行われる。奈良崎遺跡は第１章でも述べたとおり、周知の遺跡であり丘陵部分については国道116号線和島バイパス工事に伴う発掘調査が行われ遺跡の存在が確実であった。また、郷本川沿いの休耕田約1000㎡については、河川改修に伴う発掘調査で既に平成12年5月から開始していたがかなりの遺物が出土していたため、丘陵の裾部分にあたる本対象地についても発掘調査する必要があった。平成12年４月28日には小島谷地区の下ノ西遺跡とともに発掘調査費用負担契約を長岡農地事務所を経由して事業主体である新潟県と締結している。協議の結果、調査範囲は丘陵臨の現農道沿いから川筋に沿って新設される農道臨の水路施工部分で、面積は約500㎡である。

２.調査の経過

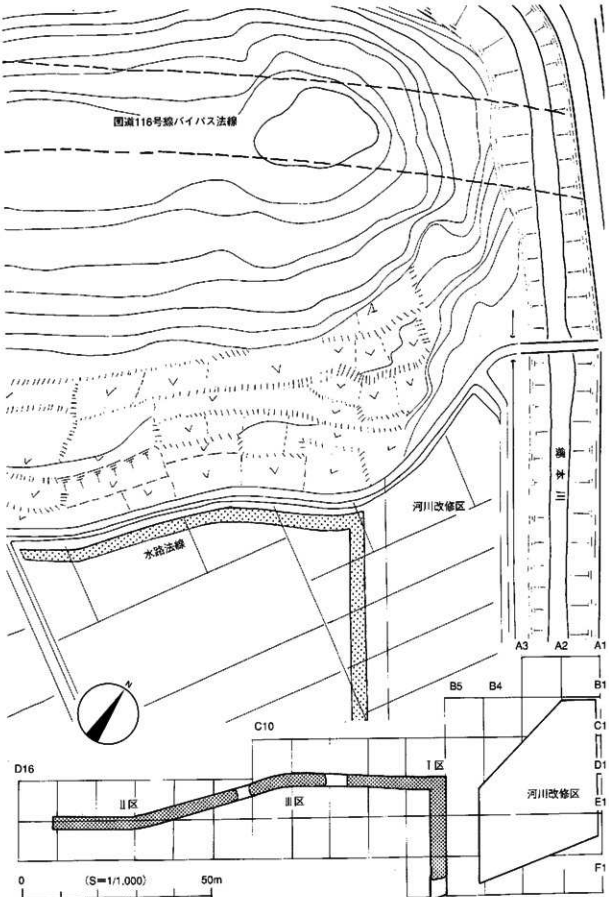
発掘調査は平成12年８月１日から11月30日まで行われた。出土した遺物量はコンテナ（38×13×53㎝）に換算して約20箱である。以下、調査終了までの経過を述べる。

河川改修による発掘調査地区の調査がほぼ終了したのち、測量基準杭の打設を終え人力による掘削を開始した。発掘時の鍵層となる泥炭層が見えてきた10月末頃には中世ごろと思われる小型の下駄が出土したが、遺物の出土は希薄であった。その後には泥炭層以下の掘削を始め、まず主に古代の土器が出土した。この頃から、天候は周期的に時雨模様になり軟弱地盤による落盤を防ぐため、木材による防護壁を構築して対処した。また、湧水対策として周囲に排水溝を設け始終水中ポンプで排水を行った。その後まもなく、古墳時代の遺物が高密度で出土し始めた。Ⅰ区では二重口縁壺片やほぼ完形の器台などのほか、木製農具の鋤が出土している。Ⅰ区は河川改修地区とわずか約10ｍの距離にあり、きわめて近似した状況を呈しているといえる。Ⅱ区でも同様に遺物が出土した。Ⅱ区中央では地山が露出しているものの目立った遺構は検出できなかった。その後、降雨が続き地盤が軟弱化し工事掘削の深度1.4mまで下げる事が、きわめて危険となり古墳時代遺物包含層の除去でとどめておく事にした。最終的には最深部で1.2mほどの深さで発掘調査を終了した。11月７日にはラジコンヘリコプターにより、空中写真測量を行い調査はほぼ終了した。11月30日には、機材の撤収を完了し現場作業は終了した。

遺物が出土してからは、並行して遺物洗浄・注記作業を行い、報告書作成の準備を開始した。

３．調査の方法

測量用のグリッドは前述のとおり、同年５月から行われていた郷本川改修地区に設定されたグリッドに基づき設定した。10m四方のグリッドを設定し、川筋方向にアルファベットでＡ、Ｂ、Ｃ…、それに直交して１、２、３、…と付した。遺物の取り上げに際してはさらに２ｍごとに分割し、１～25までの番号を付して分割し記録した。これらの記号を組み合わせて「Ｅ５－２」のように表示した。明確な遺構が欠かであったが、作業内容としては多量な遺物の出土地点と土層断面図の作成、状況写真の記録が主であった。なお、本遺跡は郷本川改修地区も含め一連の遺跡であることから各調査区の呼称は、図３の通りとする。


国道116号線バイパス法線
河川改修区
水路法線
N
A3
A2
A1
B5
B4
B1
C1
C10
D1
D16
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
河川改修区
E1
F1
G1
0
(S=1/1,000)
50m

第3図　グリッド設定図

第３章　調査の成果

１．基本層序（図版１・２）

調査区周辺は現地形では標高約12.4ｍに保たれているが、これは盛土によるもので、旧地形では起伏に富んだ沢が存在し、東南方向に向かって低くなることが確認された。前述したとおり、調査区全体で地山面を検出することは困難であったため、地山が検出された箇所以外は古墳時代の遺物包含層除去後の⑧層で測量を行った。調査区の幅はごく狭いものであるが、Ⅰ区からⅢ区を挟んでⅡ区にかけて地形の落ち込みが確認され、沢を形成していたと思われる。Ⅱ区の中央では地山が地表直下で確認でき、西端では再び沢状の地形を呈している。遺物はこの２つの落ち込みでまとまって確認されている。

本調査区での層序は、旧地形の影響で若干の違いがあるが基本土層として９つの層が確認された。

①層：表土　水田休耕後に地山土を盛った部分もあり、Ⅰ区ｅ地点での旧田面はかなり下がる。

②層：耕作土　青灰色の粘土で上部に鉄分の沈着が見られる。粘性・しまりがある。

③層：灰色粘土Ⅰ　均一に堆積しており谷が深くなるほど厚くなる。粘性・しまりがある。

④層：灰色粘土Ⅱ　部分的に③層に炭化物が混じる。中世の遺物がわずかに出土する。粘性がある。

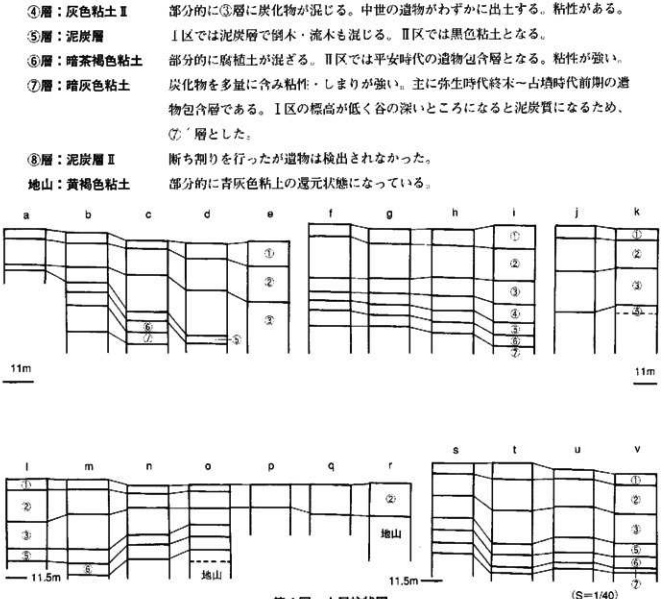
⑤層：泥炭層　Ⅰ区では泥炭層で倒木・流木も混じる。Ⅱ区では黒色粘土となる。

⑥層：暗茶褐色粘土　部分的に腐植土が混ざる。Ⅱ区では平安時代の遺物包含層となる。粘性が強い。

⑦層：暗灰色粘土　炭化物を多量に含み粘性・しまりが強い。主に弥生時代終末～古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅰ区の標高が低く谷の深いところになると泥炭質になるため、⑦´層とした。

⑧層：泥炭層Ⅱ　断ち割りを行ったが遺物は検出されなかった。

地山：黄褐色粘土　部分的に青灰色粘土の還元状態になっている。



第４図　土層柱状図

2．遺　物

遺物の出土状況

遺物はすべて包含層からの出土で、遺構出土のものは見られなかった。従って、層位・地点別に遺物を取り上げることにしたが、地山が検出された部分では包含層が薄く層位による遺物の分類は不確実な部分が残る。ここでは出土層位を加味しながら、主に形式的分類から大まかな時期を記述することにする。

遺物は弥生終末～古墳前期・古代・中世の土器、木製品、石製品が出土し、古墳前期の遺物が圧倒的に多い。その多くは⑦・⑦´層出土であるが、しばしば弥生時代と特定できるものも一緒に出土する。しかし、大半は細片であり二次堆積や流入の結果であると考える。⑥層では古代の遺物が出土しているが細片が多く図示できるものは少なかった。泥炭層の⑤層上部～④層では中世の珠洲焼の破片がわずかに出土したほか、土師器皿も見られた。Ⅰ区⑤層上面では小型の下駄が出土している。

以下、弥生・古墳の遺物はⅠ区・Ⅱ区別に主要なものの事実記載を中心に行い、それ以外の遺物は後で別に記述する。また、あわせて図版・遺物観察表も参照していただきたい。

Ⅰ区

甕（1～21）

1はハケメ調整の後、口縁部を強くヨコナデを行い、端部は摘み上げており断面は「T」字状を呈する。ハケメは特徴的で間隔が粗く勢いがある。口径16cmで残存する口縁部は約2分の1である。状態はよく硬質に焼成されている。

2は頸部で粘土帯を付加し肥厚させ、口縁端部は強いヨコナデによって面取りし断面は四角形になる。頸部には輪積み痕を残す。内外面ハケメ調整を施す。口径16.4cm（1/5）で焼成は良い。

3・4は頸部が短く屈曲し口縁端部は上方にわずかに摘み上げる。頸部と肩部の境目は肥厚し粘土の輪積み痕を残す。外面には煤が付着している。

5は口縁端部が下方に垂れるタイプで、緩く曲線的に外反する。胴部は球形に膨らみを持つ。頸部から胴部にかけてハケメ調整が施され下半部は粗く勢いがある。内面下部には焦げが見られる。口径17.8cm（1/8）で焼成は良好である。

6は短い口縁部が開き、端部は丸くなるタイプである。調整は明確ではない。外面には煤が付着する。

7～9・13・15は肩部が張り出し逆ハの字状に短く開く。

11は大きく開いた口縁部をもち端部は断面T字状になる。

16は口径16.8cm（1/4）で胴部が張らず、口縁部に最大径をもつ。端部は上方に鋭く摘み上げられる。外面には炭化物が厚く付着している。

18は直立する口縁部下位にヨコナデによって作られた隆帯がめぐる。焼成は堅緻で口径は推定で15cmほどである。

17・19・20は有段口縁を持つタイプである。17は底部まで確認できる資料で口径12.2cm、高さ10.2cm、底径1.8cmをはかる。外面は炭化物が付着している。胴部はハケメ調整、底部はケズリを施し口径に比して底径がかなり小さい。

21は、口径28cmをはかる大型品で口縁部はわずかに段を有する。

壺（22～34）

22は受け口状の口縁部に長い頸部、球形の胴部を持つ壺である。調整はハケメで間隔は細かい。胴部まで残存し、口径17.6cmである。

23・24・27はいわゆる二重口縁壺で口縁は逆ハの字に開く。外面は段状を呈するが内面に段部は存在しない。外面は丁寧にミガキが施されている。23は口径19cm（1/4）で焼成はやや軟質で不良である。24は口縁部～肩部、底部～胴部中位まで残存し外面および口縁部内面は非常に丁寧にミガキが施されている。胴部は横位のハケメ調整である。外面の色調は黒色と明褐色に極端に分かれる。底部は丸底に近く立ち上がりの稜線は不明確である。27は直線的にのびる口縁部で外面の頸部にはかすかに連続刺突痕が残る。

25は逆ハの字に開く単口縁の壺である。口径15cmで全体に厚手のつくりである。胴部に煤が付着する。

29は短く直立した口縁部を持つ壺である。口径11.6cm（1/3）をはかる。

32～34は短頸壺で32・34は口縁端部が短く外反し、33は上方に立ち上がる。いずれもヨコナデによって端部を作り出している。

器台・その他（35～47）

36は受部をわずかに欠損するほかは、ほぼ完形に近く良好な保存状態であった。外面と受部内面にミガキ・赤色塗彩が施される。受部端部は上方に立ち上がり、脚部裾はハの字状に広がる。口径10.3cm、脚部径13.1cm、器高9.9cmである。透かし穴は1孔3対ある。

37は内湾する受部と脚部を持つ。内外面ともにミガキが施され、透かし穴は1孔3対である。赤色塗彩はされず、薄い褐色を呈する。口径8.8cm、脚部径11cm、器高9.9cmを測る。

39は器台脚部で脚部は裾部で若干内湾する。受部は欠損するが受け部に穿孔があり、透かし穴は2孔3対施される。

44は高坏と思われる。破片資料のため口径は不明瞭だが、推定で約20.6cmである。

45は台付壺の台部と思われる。

46は蓋である。つまみ径は3.2cm、外径は5.6cmで小型品である。

Ⅱ区

甕（48～73）

48・51・54・61は有段口縁で口縁部外面に4～5条の擬凹線文を施す甕である。48は断面三角形となり、外面に擬凹線文が施される。54・61は口縁端部が外反し頸部は短く屈曲する。61は口径より胴部径のほうが上回り、54ではほぼ同径となる。いずれも頸部内面に粘土輪積み痕を残す。薄手のつくりで内外面ともにハケメ調整である。口径は17cm（61）、15.6cm（54）で外面には炭化物が付着する。

51は口縁部が断面三角形を呈し外反しない。口径は20cm（1/8）である。

49・50・53・58は有段口縁だが口縁部外面は無文のものである。受け口状の口縁部を持ち、口径は14cm（49）、13cm（50）、14cm（58）が見られる。53は上方に直立し口縁部断面は直角三角形に近い。頸部に粘土輪積み痕が見られる。

52～61はくの字状に曲がる口縁部を持つ。52は口縁部が短く開き端部が摘み上げられている。

59は頸部に粘土輪積み痕を残す。口縁端部は真横に面を取り下方にやや下がる。口径16.4cmで橙色～黒色を呈する。

57は口縁部外面でわずかに段状になっている。口径は約25cmと大型である。

69～71は直線的に屈曲する。これらは口縁部が短く、上方にわずかに摘み上げられるものと丸くなるものがある。

63はくの字に曲がりさらに口縁端部が広がる。63は口径16cm、同一個体と思われる底部はケズリを施して整形し、底径4.8cmである。焼成は良好で黄褐色を呈する。

64・65は胴部が球形のように膨らみ、口縁部は曲線的に開く。口縁端部は丸みを帯びている。内外面ハケメ調整で、口径は15.8cm（64）と14cm（65）である。

67・68は口縁部がくの字に曲がり胴部はなだらかに膨らみそれほど肩部は張らない。68は頸部に粘土輪積み痕を残し、内外面ハケメ調整で口径は15.8cmをはかる。67は口径12.4cmをはかり、口縁部端部は若干摘み上げられる。

62は受け口状の口縁部を呈する。口径21cmを測る。

壷（73～85）

73は緩やかに広がる口縁の端部に上方に摘み上げられ、断面が三角形を呈する。内外面ハケメ調整されるが、粘土輪積み痕が残る。

74は二重口縁壷で断面は分厚い三角形を呈し、内面は段を形成しない。頸部は短くすぐに胴部に移行する。口径は14.8cmで、内外面赤褐色を呈する。

75は二重口縁の装飾壷と思われる口縁部片である。外面には3段の円文が竹管状の工具で施され、縦位に3本の粘土帯が貼り付けられハケ状工具でキザミを入れている。口径は推定で約19cmである。焼成は不良で、内外面は暗茶褐色を呈する。

76・77は外面のみ二重口縁となる。口径は9.8cm、12cmと小型となるが胴部は強く張るものと思われる。

79は有段口縁の壷で外面に擬凹線文が施される。

81・82は長頸となるもので81は直角に屈曲してさらに端部が摘み上げられる。口径は17.8cmを測る。82は緩く広がり端部が摘み上げられている。

84・85は無頸の壷で口縁端部が短く外反する。84は口径8.6cm、85は13cmである。84は手づくね整形の後粗いハケメで調整している。85は細かいハケメ調整で外面に炭化物が付着している。

高坏・その他（86～100）

86は高坏の口縁部片で口径は約16cmである。口縁部は直線的に伸び端部は上方に面を取る。

87～90・92・93・94・99・100は高坏脚部と思われる。88は中空の脚部裾が短く直線的に開く。外面はミガキが施されている。脚部径は9.6cmで暗褐色を呈する。

90はいわゆる棒状有段脚の棒状の部分である。外面はミガキ、内面はケズリによって整形される。

93は小型高坏で脚部の裾が低平に広がる。外面にはミガキが施され1単位の透かし穴が施される。

94は脚部が太いもので透かし穴も粗雑にあけられている。

99・100は筒状に長く伸びた脚部が裾部で屈曲して開くものと思われる。100は粘土の輪積み痕がみられ中期的様相を帯びる。

古代・中世の遺物

有台坏（105）須恵器の有台坏で口径9cm、底径5.2cm、高さ4.9cmを測る。坏部はほぼ直立し深めの身をつくる。時期は9世紀であろう。

無台坏（103・104）それぞれ破片資料であるが口径は16～17cmほどと思われる。92の底部は回転糸切痕が見られる。時期は9世紀であろう。

甕（106）薄手のつくりで口縁部は受け口状を呈する。口径は約16.8cm、褐色を呈し焼成は良好である。

中世土師器（108・109）

108は灯明皿に利用されたと見られ、内面には炭化物・油煙痕が見られる。口径13cm、高さ3.2cmである。非ロクロ成形手づくね技法で底部は丸みを帯びて口縁部に至り、端部はヨコナデされる。その結果口縁部断面は2段の波状の凹凸を作っている。底部～口縁部下半部は手づくねによる指頭圧痕がかすかに見られる。焼成は良好で灰白色を呈する。形態的に見て時期は13世紀後半代と考えられる。

109はてづくね整形で指頭痕を残し、口縁部はヨコナデされない。

木製品（110・111）

下駄（110）Ⅰ区⑤層上面より出土した。長さ15cm、幅7cm、高さ2.5cmの小型品である。

鋤（111）Ⅰ区14⑦層より出土した。長さ52.5cm、幅22.5cm、厚さ1.2cmである。表面は植物の根による腐蝕が見られる部分もあり、加工痕は基部以外では認められず先端部分が欠損している。厚さは左側が厚く右側が薄いため表面を撃えたようではなく木を裂いたままの状態とも考えられ、未製品の可能性もある。周辺から古墳時代前期の土器などが出土している。

石器・その他（112～113）

太型蛤刃石斧（112）下半部の刃部を欠損しているが形状から蛤刃石斧と考えられる。現存長8cm、幅6.4cm、厚さ4.6cmで石材は安山岩である。Ⅱ区、⑦層から出土している。

石錘（113）楕円形の平たい川原石を用いて両端を剥離させ縄掛けを作り出している。長さ9.5cm、幅5.5cm、厚さ2.4cmを測り石材は凝灰岩である。Ⅰ区⑤層から出土している。

砥石（114）欠損した上半部の側面をのぞき前面に研磨の痕跡が見られる。現存長6cm、幅2cm、厚さ3cmを測り、石材は凝灰岩である。Ⅱ区、⑦層より出土している。

羽口（115）約1／3が残存している。実測図から復元すると内径で約6cmである。Ⅱ区から出土している。

遺物観察表（1）

番号	出土地点	層位	種別	器種	法量	遺存	胎土	色調	焼成	備考
1	D6−1, 2	⑦	弥生	甕	口径16	1/2	2 mm砂粒	内外：灰褐色	良	外面：ススス
2	D6−1, 2	⑦	弥生	甕	口径16.4	1/5	1 mm砂粒	内外：褐色	良	内外面：ハケメ
3	D6−1, 2	⑦	弥生	甕	口径16	1/4	2 mm砂粒	粒	普通	
4	D6−11	⑦	弥生	甕	口径11.8	1/4	1 mm砂粒	内：暗茶褐色 外：黒色	普通	内面：ハケメ 外面：ススス、ハケメ
5	E5−6	⑦	古墳	甕	口径17.8	1/8	1 mm砂粒	内：茶褐色	普通	外面：ススス
6	D6−6	⑦	古墳	甕	口径17.8	3/4	1 mm砂粒	内：灰褐色	良	外面：ススス
7	D5−22	⑦	古墳	甕	口径14	1/2		内：橙色 外：橙褐色	不良	
8	D5−9	⑦	古墳	甕	口径19	1/7	0.5mm砂粒	内：褐色	良	外面：ススス
9	D5−6	⑦	古墳	甕	口径17	1/5	2 mm砂粒	内:灰褐色 外：褐色	普通	外面：ススス
10	E5−6	⑦	古墳	甕	口径18	1/2	2,3mm砂粒	内:外:褐褐色	良	内外面:炭化物、ハケメ
11	D6−11	⑦	古墳	甕	口径18.6	1/4	3 mm砂粒	内：褐色 外:桃褐色	良	
12	D6−11	⑦	古墳	甕	口径16	1/4	2 mm砂粒	内外：褐色	普通	外面:ハケメ,炭化物
13	D6−11	⑦	古墳	甕	口径16	1/8		内:暗茶褐色	不良	外面：ススス
14	D6−6	⑥·⑦	古墳	甕	口径18	1/9	1 mm砂粒	内外：灰褐色	不良	内外面：ハケメ
15	D6−6	⑥·⑦	古墳	甕	口径17.8	1/5	2 mm砂粒	内：茶褐色	良	内面：ハケメ 外面：ハケメ，炭化物
16	D6−11	⑦	古墳	甕	口径16	1/4	2 mm砂粒	内外：灰褐色	不良	内外面：ハケメ
17	D6−1, 2	⑦	古墳	甕	口径12.2 器高10.2 底径1.8	1/8 1		内：明黄褐色 外：黒色	良	外面：炭化物、ハケメ 底部ケズリ
18	D6−1, 2	⑦	古墳	甕	口径15	1/8	2 mm砂粒	内外：灰褐色	良	
19	D5−9	⑦	弥生？	甕	口径17	1/9		内：黄褐色	良	外面：ススス
20	D5−10	⑦	古墳	甕	口径12.2	1/8		内：褐色 外：黒色	普通	外面：炭化物
21	D6−6	⑥·⑦	古墳	甕	口径28	1/2	2 mm砂粒	内外:濃褐色	普通	
22	E5−8	⑦	古墳	壺	口径17.6	1	0.5mm砂粒	内：褐色 外：明褐色	良	内面：ハケメ 外面：ハケメ
23	D6−11	⑦	古墳	壺	口径19	1/4	2 mm砂粒	内：灰色 外：明褐色	不良	外面:ハケメ
24	D6−6	⑥·⑦	古墳	壺	口径14.2	1/5	骨針	内:黄褐色 外:黒,明褐色	良	外面：黒斑、ミガキ 内面：ミガキ、ハケメ
25	D6−11	⑦	古墳	壺	口径15	1/4	1 mm砂粒	内:灰褐色 外:橙褐色	不良	内外：ハケメ
26	D5−11	⑥	古墳	壺	口径10		2 mm砂粒	内：橙色 外：暗茶褐色	普通	内面：ハケメ
27	D6−6	⑦	弥生？	壺	口径15	1/8	2 mm砂粒	内：灰褐色 外：橙色	普通	口縁部外面キザミ
28	E5−7	⑦	古墳	壺	口径11.6 底径4.8	1/6	1 mm砂粒	内:外：褐色	普通	内面：ミガキ 外面：ミガキ
29	D6−6	⑥·⑦	古墳	壺	口径11.6	1/3	2 mm砂粒	内：灰色 外：橙色	普通	外面:炭化物
30	D6−1, 2	⑦	古墳	壺	口径9.2	1/10	1 mm砂粒	内：灰褐色 外：灰明褐色	普通	外面：ミガキ、4条の沈線
31	D6 21	⑦	古墳	壺	口径16.2	1/3	1 mm砂粒	内：灰色 外：褐色	普通	内外面：ヨコナデ
32	D6−1, 2	⑦	古墳	壺	口径12.6	1/4	2 mm砂粒	内外：暗褐色	不良	内面：ハケメ
33	D5−10	⑦	古墳	壺	口径18	1/3	2 mm砂粒	内：淡灰色	良	外面:炭化物、ハケメ
34	E5−6	⑦	古墳	壺	口径10.2	1/4	1 mm砂粒	内外：灰褐色	不良	外面：ススス
35	D6−6	⑦	古墳	高坏脚部			1 mm砂,骨針	内外：橙褐色	良	外面：ミガキ
36	E5−6	⑦	古墳	器台	受部10.3 器高9.9 脚径13.1	1		内外：暗褐色	良	内面：ミガキ、ハケメ、赤彩 外面：ミガキ、赤彩 3方透かし（1孔）
37	E5−6	⑦	古墳	器台	受部8.8 器高9.5 脚部11	1/2 1	3 mm砂粒	内外:褐色	良	内外面:ミガキ 3方透かし（1孔）
38	E5−7	⑦	古墳	器台	受部 9 器高8.8 脚径11.8	1/4	1 mm砂粒	内外:褐色	不良	内外面:ミガキ 1孔透かし
39	D6−6	⑥·⑦	古墳	器台脚部	脚径12.2	1	1 mm砂粒	内外：暗褐色	普通	内面：ハケメ、ミガキ 外面：ミガキ、2孔1対透孔
40	D6−6	⑦	古墳	脚部	脚径13.3	1	1 mm砂粒	内外：桃褐色	良	内面：ケズリ 外面：ミガキ
41	D6−11	⑦	古墳	器台	口径9.9	1	緻密	内外：橙色	不良	内外：ミガキ、赤彩
42	D6−1, 2	⑦	弥生	脚部	口径16	1/8	2mm砂粒	内：黒灰色 外：褐色	良	
43	D5−22	⑦	古墳	器台？	口径24.2	1/12	1 mm砂粒	内外：灰褐色	不良	内外：ミガキ
44	D5−9	⑦	古墳	高坏？	口径20.6	1/12	1 mm砂粒	内外：褐色	良	内外面：ミガキ

遺物観察表（2）

番号	出土地点	層位	種別	器種	法量	遺存	胎土	色調	焼成	備考
45	D6−16	⑦	古墳	脚部	脚径8.2	1/8	1 mm砂粒	内外:明褐色	良	
46	D6−11	⑦	古墳	壺	口径8.4 器高3.1	1/2	微粒子	内外：灰褐色	良	かえりが矢羽の可能性あり
47	D6−16	⑦	古墳	底部			1 mm砂粒	内：明褐色 外：黄褐色	普通	外面：炭化物
48	E14−1	⑦	弥生	甕	口径16	1/8	2 mm砂粒	内外：薄桃色	普通	4条の擬凹線
49	D11−4	⑦	弥生	甕	口径14	1/6	1 mm砂粒	内外：橙色	普通	ヨコナデ
50	E4−11	⑦	弥生	甕	口径13	1/5	2 mm砂粒	内：橙色 外：黄褐色	良	4条の擬凹線
51	E4−16	⑥・⑦	弥生	甕	口径20	1/8		内：淡桃色 外：黄褐色	不良	4条の擬凹線
52	D11−4	⑦	弥生	甕	口径20	1/8	2 mm砂粒	灰白色	良	外面炭化物
53	E14−1	⑦	古墳	壺	口径16	1/6	1 mm砂粒	内：灰色 外：褐色	良	
54	E13−11	⑦	古墳	壺	口径15.6	5/8	1 mm砂粒	内:明茶褐色 外：暗褐色	普通	外面：スス
55	Ⅱ区北側	⑦	古墳	壺	口径20	1/8	2 mm砂粒	内:灰白色 外:薄桃色	普通	外面:炭化物
56	D11−19	⑦	古墳	壺	口径17.6	1/8	0.5mm砂粒	内：淡褐色	普通	外面：ハケメ、炭化物
57	E4−16	⑥・⑦	古墳	壺	口径25	1/12	1 mm砂粒	内：灰色 外:淡茶褐色	不良	外面：スス
58		⑦	弥生	壺	口径14	1/6	2 mm砂粒	内：黄白色 外：淡褐色	普通	内外ハケメ
59	E14−1	⑦	弥生	壺	口径16.4	1/4	1 mm砂粒	内：赤橙 外：赤橙.黒	普通	内面：ハケメ 外面：ハケメ、スス
60	E13−21	⑨	弥生？	壺	口径17	1/4	2 mm砂粒	内外:淡橙褐色	良	内外面：ハケメ
61	E13−11	⑦	古墳	壺	口径17	1	2 mm砂粒	内:赤褐色 外:暗灰褐色	不良	外面：スス
62	E14−1	⑦	古墳	壺	口径21	1/5	1 mm砂粒	内外:褐色	良	ヨコナデ
63	E4−16	⑥・⑦	古墳	壺	口径16 底径4.8	1/3 1	1 mm砂粒	内:淡灰褐色 外:淡灰褐色	良	外面：ハケメ、ケズリ 内面：ケズリ
64	E14−1	⑦	古墳	壺	口径15.8	1/4	1 mm砂粒	内：灰色 外：褐色	普通	外面：炭化物
65	E14−1	⑦	古墳	壺	口径14	1/6	1 mm砂粒	内外:明褐色	普通	内外面:ハケメ
66	Ⅱ区北側	⑦	古墳	壺	口径18	1/8	3 mm砂粒	内外:薄桃色	普通	タタキ整形
67	E14−1	⑦	古墳	壺	口径12.4	1/4	2 mm砂粒	内：褐色 外：黒色	良	内面：ハケメ
68	E14−1	⑦	古墳	壺	口径15.8	1/4	2 mm砂粒	内：赤橙.灰色 外：褐色	普通	内外面：ハケメ 赤色酸化物混入
69	D11−9	⑦	古墳	壺	口径17.6	1/6	2 mm砂粒	内外：橙色	普通	赤色酸化物混入
70	E14−1	⑦	古墳	壺	口径15	1/12	2 mm砂粒	内：褐色	良	外面：炭化物
71	E14−1	⑦	古墳	壺	口径17.8	1/12	3 mm砂粒	内外：橙褐色	良	内外面:ハケメ、赤色酸化物
72	E13−21	⑦	古墳	壺	口径18	1/8	1 mm砂、骨針	内外:淡灰褐色	普通	
73	Ⅱ区北側	⑦	古墳	壺	口径16	1/8	0.5mm砂	内外：灰褐色	普通	外面：ミガキ
74	D10−18	⑦	古墳	壺	口径14.8	1	2 mm砂粒	内外：赤褐色	普通	
75	E14−1	⑦	古墳	壺	口径19	1/8	1 mm砂粒	内外:暗灰褐色	不良	東海系？円文、粘土降帯
76	E13−21	⑦	弥生？	壺	口径9.8	1/8	1 mm砂粒	内：灰、桃白色 外：桃白色	不良	
77	E14−1	⑦	弥生？	壺	口径12	1/4		内外:明褐色	良	
78	E14−1	⑦	古墳	壺	口径15	1	2 mm砂粒	内外：黄褐色	不良	
79	D11−9	⑦	弥生	壺	口径19	1/10		内外：黄白色	良	6条の擬凹線
80	Ⅱ区北側	⑦	古墳	壺？	口径18	1/8	1 mm砂粒	内：淡灰褐色	普通	外面：ハケメ
81	D11−9	⑦	弥生	壺	口径17.8	1/12	1 mm砂粒	内：褐色 外：暗褐色	普通	内面：ハケメ
82	Ⅱ区北側	⑦	古墳	壺？	口径13	1/8		内：暗褐色 内外:淡褐色	良 良	外面：ミガキ
83	E4−11	⑥	古墳	鉢						
84	Ⅱ区北側	⑦	古墳？	小鉢	口径8.6 器高5.2 底径2.4	1	3 mm砂粒	内：褐色 外：褐色.灰	不良	手づくねの後粗雑なハケ
85	E13−11	⑦	古墳	壺	口径13	1/5	1 mm砂粒	内外:淡黄褐色	普通	内面：ハケメ 外面：ハケメ、炭化物
86	E4−11	⑦	弥生	高坏	口径16	1/8	3 mm砂粒	内：淡橙色 外：淡桃色	不良	
87	Ⅱ区	⑦	古墳	脚部	脚径16	1/6	2 mm砂、骨針	内外：暗褐色	良	内外面：ミガキ
88	Ⅱ区北側	⑦	古墳	脚部	脚径9.6	1/12	微密	内外:黒茶褐色	普通	外面：ミガキ
89	D11−9	⑦	弥生？	脚部	脚径18.6	1/3	1 mm砂粒	内：褐色 外：黒・褐色	普通	内面：ハケメ 外面：ミガキ、赤彩
90	E13−21	⑦	弥生	脚部				内外：褐色	良	外面：ミガキ
91	D11−4	⑦	弥生	脚部	脚径14.4	1/8		内外：褐色	普通	
92	E14−1	⑦	弥生	高坏脚部	脚径20		0.5mm砂 骨針	内外：褐色	良	外面：ミガキ
93	E13−21	⑦	古墳	高坏脚部			1 mm砂粒	内外：褐色	良	内外面：ミガキ
94	E4−11	⑥・⑦	古墳	高坏脚部			2 mm砂粒	内外:黄褐色	不良	

遺物観察表（3）

番号	出土地点	層位	種別	器種	法量	遺存	胎土	色調	焼成	備考
95	E14−1	⑤	古墳	器台脚部				内外:淡褐色	良	内面：ハケメ 外面：ミガキ
96	E13−11	⑤	古墳	器台脚部	脚径12	1	2㎜砂粒	内外：褐色	良	内面：ハケメ 外面：ミガキ
97	Ⅱ区北側		古墳	底部			1㎜砂粒	内外：黒色	普通	底部：焼成前穿孔1孔
98	E13−21	⑥・⑦	弥生	底部	底径5	1/2	2㎜砂粒	内外:淡褐色	良	底部：焼成前穿孔1孔 外面：ケズリ
99	E4−16	⑥・⑦	古墳	高坏脚部			1㎜砂粒	内：淡褐色 外：灰色	普通	
100	E13−11	⑦	古墳	高坏脚部			1㎜砂粒	内:灰褐色 外：灰色	普通	
101	E14−1	⑥	弥生？	底部	底径2.6	1	1㎜砂粒	内：灰黒色 外：淡黄白色	不良	外面：赤彩
102	E13−21	⑦	弥生	底部	底径6.4	1	1㎜砂粒	内面：灰褐色 外面：褐色	普通	外面：ハケメ 底部：焼成後穿孔
103	E13−6	⑥	土師	坏	口径18 器高5 底径10.8	1/7		内外：橙褐色	良	底部：回転糸切
104	E4−16	⑥	土師	坏	口径16	1/8			良	
105	E13−11	⑥	須恵	坏	口径9 器高4.9 底径5.2	1/2		内：灰色 外：暗青灰色		内面：自然釉
106	E13−11	⑥	土師	甕	口径16.8	1/12	1㎜砂粒	内外：褐色	良	
107	E13−21	⑥	土師	底部	底径6	1	1㎜砂粒	内外：茶褐色	良	底部：静止糸切
108	Ⅲ区	①	中世	皿	口径13	1/4		内外:淡黄白色	良	内外面:炭化物
109	E14−1	⑤	中世	皿	口径14	1/8		内外:淡褐色	普通	手づくね

番号	出土地点	層位	種別	種類	大きさ	備考
110	E13−6	③	木器	小型下駄	長さ15　幅7　厚さ1.4　高さ2.5	
111	D5−6	⑦	木器	櫛	長さ52.5　幅22.5　厚さ1.2	
112	E14−3		石製品	石斧	長さ8　幅6.4　厚さ4.6	太型蛤刃石斧
113	D6−21	③	石製品	石錘	長さ9.5　幅5.5　厚さ2.4	
114	Ⅱ区北側	⑦	石製品	砥石	長さ6　幅2　厚さ3	
115	Ⅱ区北側			羽口	長さ6.4　幅7.7　厚さ3.5	

第4章　まとめ

前述のとおり⑦・⑦´層では弥生時代後期～古墳時代前期頃の土器が比較的多く出土している。遺構出土遺物は確認されなかったが、分類を行うことによりある程度の時期が特定されるものと思われる。したがって本章では⑦・⑦´層出土土器の大まかな年代を記述した後、本遺跡の性格などに触れまとめとする。

1．土器分類

甕

A類（48・51・54・61）

有段口縁で擬凹線を施すもの。弥生時代後期の刀影式に系譜が求められる。

B類（17・19～21・49・50）

有段口縁であるが無文のもの。

C類（1～3・7・8～16・52・60・64・69～72）

くの字口縁となるもの。口縁端部を摘み上げるもの（1～3・8・52・60）や強く外反するもの（10・15・64）直線的に伸びるもの（9・12・13・16）など多様である。

D類（5・6・55・56・59・63・65）

口縁部が途中で屈曲して開き断面がコの字形を呈するもの。口縁端部を摘み上げるもの（5・6・59）や、丸く納めるもの（65）がある。また、長めの口縁部をもちヨコナデによって端部で屈曲する63もこのタイプに含めた。

E類（4・67・72・73）

口縁部が短く受け口となるもの。口縁端部が鋭く摘み上げられ胴部がほとんど張らないものが多い。

壺

A類（21～24・27・74～79）

有段口縁となるもの。筒形の頸部をもつもの（22）や外反する長い口縁部をもつもの（23・24）、口径の小さい有段壺（76～78）・擬凹線文のもの（79）などバラエティーがある。

B類（25）

くの字口縁となるもの。25の1点が確認される。

C類（31・32・34）

頸部がほぼ直立し口縁部が短く屈曲するもの。口縁端部は丸いもの（31）と短く屈曲して端部に面を取るもの（32・34）がある。

D類（28・29・30）

口縁部が内湾しながらほぼ直立するもの。

E類（75）

外来の影響を受けたもの。竹管状の施文具で円文を施し粘土帯に連続してキザミを入れるなどの特徴から東海系の影響を受けたものと思われる。

F類（85）

いわゆる無頸壺で口縁端部がほんのわずかに外反する。

G類（26）

丸底になる小型壺。

器台

A類（36）　脚部がハの字に開き、受け部は浅く口縁部が摘み上げられるもの。

B類（37）　細身の脚部で裾が内湾し、受け部は浅く内湾するもの。

C類（38）　脚部は低く内湾し受け部は直線的に開くもの。

D類（96）　粗雑なつくりで脚部が内湾するもの

高坏

A類（35・40・44・86・90）

弥生時代後期に特徴的な棒状脚や口縁部が長く直線的あるいは外反する坏部をもつもの。

B類（93）

東海系の影響を受けたと思われる脚裾部が低平に広がるもの。

C類（99・100）

脚部が直線的に伸びて裾部で急激に屈曲するもの。

鉢（84）

粗いハケメ調整で粗製のもの。

2．土器の年代

新潟県内において古墳時代前期の遺跡としては、黒埼町緒立遺跡・聖籠町山三賀Ⅱ遺跡・巻町南赤坂遺跡・六日町金屋遺跡本遺跡・上越市一之口東地区遺跡などが知られている。これらはいずれも土坑・住居址等を中心にした遺構出土遺物が報告されており貴重な資料といえる。これまでの当該期の既存編年案としては、北陸加賀地方では漆町編年〔田嶋1986〕が、北陸北東部に位置付けられる越後では坂井秀弥・川村浩司両氏の編年案が提示されている〔坂井・川村1993〕。本遺跡では遺構出土遺物が確認されないため、細かな時期特定は行わなかったが大まかな時期としては以下のようになろう。

弥生時代後期後半～終末期

北陸の法仏式・月影式に相当する。出土数は少なく散発的に見られるため詳細は不明であるが、甕ではA類の48、C類の1・2・52、壺では27・76・77・79がこれに相当し高坏（86）、高坏脚部の棒状脚（90）、裾の広がりが小さいもの（88）も加わる。ただ、甕の48は口縁部断面がほぼ正三角形を呈し、口縁部が発達していないため古い様相をもっている。時期的には当期より遡る可能性も考えられる。また、石器の太型蛤刃石斧（112）もこの時期の所産となる。

古墳時代

①前期初頭

弥生時代後期の北陸的な特徴を残しながら外来系の土器が見られる。甕では54・61といったA類がみら

れ、有段口縁・擬凹線文を施すものが残存する。この二つの土器は口縁部の形態から見ると当期の中では古い特徴をもっていると思われる。また引き続き無文のB類も残る（53）。両者ともL1縁部は長く外反し頸部に粘土輪積み痕を残すなど形態化している。甕C類では64のような胴部が球形に強く張り出すものも見られる。壺ではA類の24・C類の32・34がこの時期のものと思われる。その他の器種は明確に区別できなかった。漆町編年の5・6群土器とほぼ併行する頃と考える。

⑫前期前半

前段階の外来系土器が定着・発展する時期で主に東海系土器の影響が高坏・器台等に見られる。古相と新相の可能性が考えられる。

甕ではD類の5・6のような口縁部がコの字形のものが当期に想定できる。またC類の11のように胴部が大きく張るものも見られる。後出的な要素をもつものとしてはC類の10が見られる。

壺ではA類で大型の二重口縁壺が見られる。22は越後における古墳出現期に相当する巻町山谷古墳出土土器に類似しこれとほぼ同時期ではないかと思われる。なお、同出土遺物は新潟シンポ編年の8期に比定されている。また、L1縁部が大きく外反する23やD類の28もこの時期頃と思われる。

小型の上器では器台のA類（36）・C類（38）、小型鉢の84なども確認される。高坏ではA類の40、B類の93もこの頃であろう。漆町7・8群と併行すると思われる。

⑬前期後半

東海系の土器が大幅に減少し、加折脚高坏など畿内系の影響下にある上器が確認できる時期とされる。甕ではD類の63がこの頃と考えるが前後するかもしれない。C類の9・15・16などもこの頃の所産であると考える。漆町9・10群頃と思われる。

⑭前期終末以降

この時期の遺物はほとんど確認されなかったが、高坏脚部の99・100などが該当すると思われる。

3．遺跡の性格

奈良崎遺跡は今回の水路部分調査では、おもに弥生時代終末～古墳時代前期の遺物が出土している。実際の数量は確認していないが、内容的には古墳時代前期前半とそれ以前の資料が主体的である。残念ながら本調査区からは目立った遺構は確認できなかったが、周辺における過去の調査成果を加味することでこの遺跡の様子が垣間見ることができるだろう。

丘陵上では前方後方型墳墓や円形周溝墓、鉄鏃・玉類などの副葬品を出土した古墳が検出されている。正式には未報告なので詳細は不明であるが、これらとも関る遺物であろう。これに付随する居住域ははっきりしないが、丘陵裾部の比較的平坦な部分にあったのではないだろうか。ただ、今回はあくまで遺跡本体の周縁部と捉えるのが妥当であり、これらの遺物も2次堆積の結果とも考えられる。

本遺跡の出土土器には弥生時代後期のものや、古墳時代初頭の汎北陸的な月影式系譜を残す上器とともに東海系の影響を受けた壺・高坏・器台などの小型祭式上器が見られ、東日本における広域的な土器の移動を示している。その後は畿内系上器が東海系に換わるとされるが量的には少なく不明である。県内で当該期における集落遺跡などとしては聖籠町山三賀Ⅱ遺跡・黒埼町緒立遺跡・巻町南赤坂遺跡・六日町金屋

遺跡・上越市一之口（東地区）遺跡などが挙げられる。蒲原平野では緒立八幡神社古墳（黒埼町）・山谷古墳・稲荷塚古墳・高蒲塚古墳（巻町）・二王山古墳群（三条市）・古津八幡山古墳（新津市）など前期古墳が点在して分布し、調査によって越後における古墳出現前後の様相が解明されてきている。これに対し奈良崎遺跡の近隣では未調査ではあるが赤坂遺跡群といった弥生時代後期の高地性環濠集落も存在し、さらに古墳時代前期とされる下小島谷古墳群や大久保古墳群など古墳出現期の遺跡が確認されてきており、今後さらに資料が増加すれば島崎川流域における当該期の一連の様相が明らかになってくるだろう。

一方、1区の南側では鋤が出土している。詳細な時期は断定できないが、低湿地では稲作が行われていたことを裏付けている。近隣の大武遺跡では弥生時代後期～古墳時代の水田跡が検出されており、この周辺でも水田の存在する可能性は高い。以後、低湿地では水田や自然流路として機能したと思われる。

時代別に見ると遺物の分布にはあまり偏りは見られないが、古代の遺物はⅡ区において若干多く出土している。中世の遺物は今回の調査では中世土師器・珠洲細片などが出土したのみであるが、南北朝時代を中心とした山城跡が丘陵先端部で検出されている（詳細は未報告）。

今回の発掘調査は調査範囲が広範に渡るが、トレンチ幅が狭いため遺構検出はされず遺跡の具体的な内容はつかめなかった。しかし、逆に言えば100mに及ぶ調査区全域から遺物が検出され、過去の調査や分布調査の結果も考慮すると本遺跡はかなりの広がりをもつことが実証されたといえる。

参考文献

甘粕　健　1993　「磐越地方の前期古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究グループ

甘粕　健　1993　「越後山谷古墳」新潟県巻町教育委員会　新潟大学考古学研究室

川村浩司　1993　「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』新潟大学環日本海地域比較史研究会

北村充ほか　1983　「緒立遺跡発掘調査報告書」黒埼町教育委員会

坂井秀弥　1989　「第Ⅳ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集　山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所

坂井秀弥・川村浩司　1993　「古墳出現前後における越後の上器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究グループ

田嶋明人　1986　「漆町遺跡」Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター

古岡康暢　1983　「日本海の土器・陶磁器」（古代編）　人類史叢書　六興出版

渡辺ますみ　1994　「緒立C遺跡発掘調査報告書」　黒埼町教育委員会

鈴木俊成ほか　1994　「新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区」新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

栃木英道　1995　「谷内・杉谷遺跡群Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター

日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　「東日本における古墳出現過程の再検討」

春日真実　1999　「第3章４－２　木器」　「新潟県の考古学」新潟県考古学会　高志書院

和島村　1996　「和島村史」資料編Ⅰ　自然・原始古代・中世・文化財

和島村　1997　「和島村史」通史編

荒木勇次　1994　「山谷古墳」「巻町史」資料編１考古　新潟県巻町

荒木勇次　1994　「大沢遺跡B´地区」「巻町史」資料編１考古　新潟県巻町

小野　昭ほか　1982　「大沢遺跡・Ⅱ」新潟大学考古学研究室

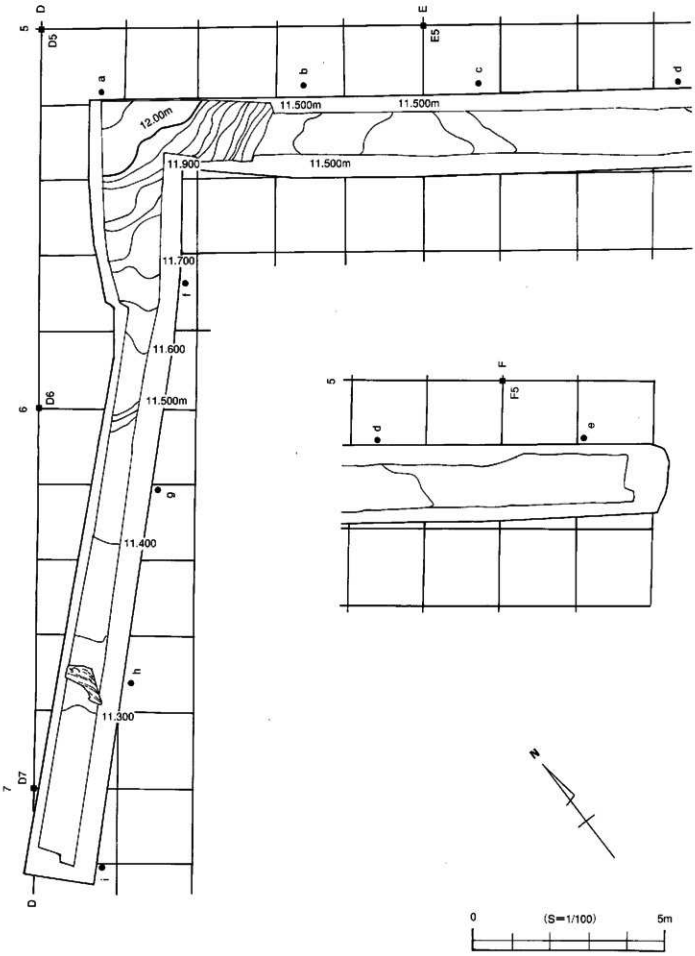
岡本郁栄　1999　「序章第1節　新潟県の地形概観」「新潟県の考古学」新潟県考古学会　高志書院

金子正典ほか　1999　「第3章２－３　弥生後期」「新潟県の考古学」新潟県考古学会　高志書院

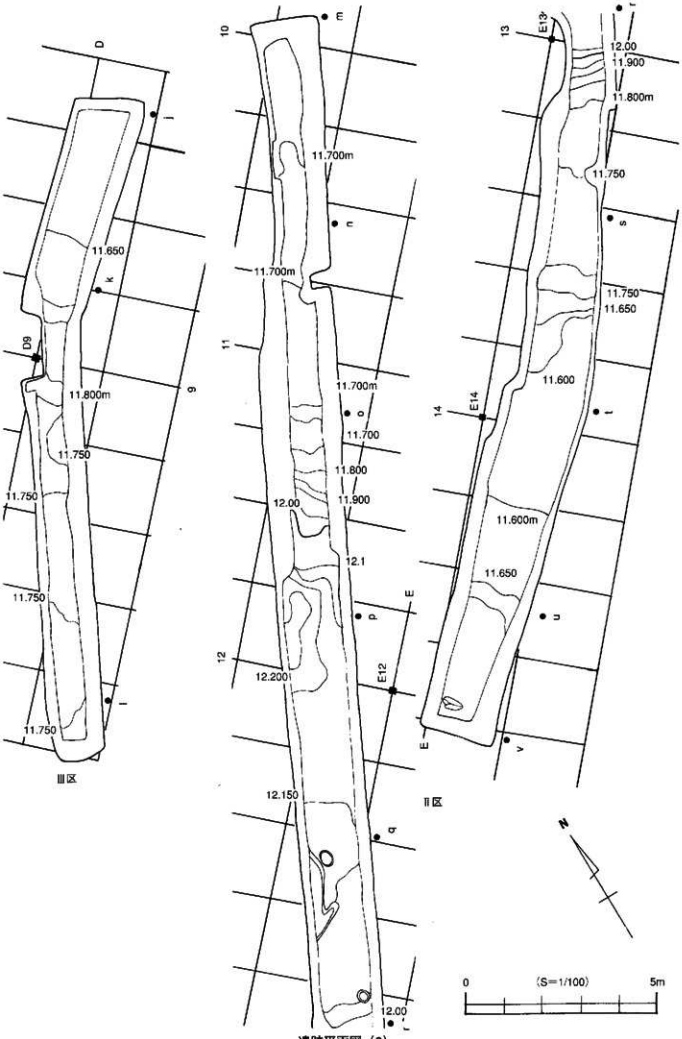
金子正典　1999　「経塚山遺跡」「新潟県三条市　内野出遺跡　経塚山遺跡　市内発掘調査報告書」三条市教育委員会

出越茂和　1995　「上荒屋遺跡Ⅰ」金沢市教育委員会

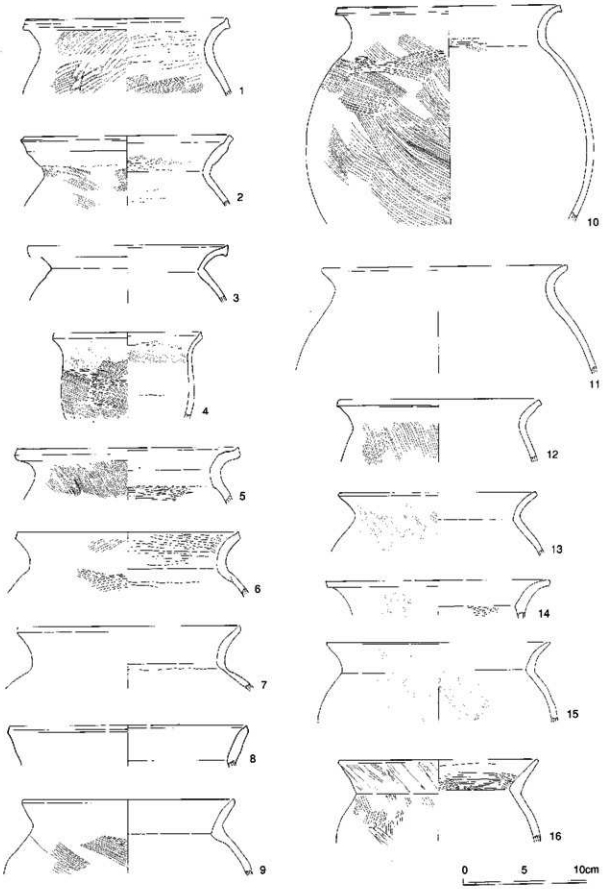
図　　版


5
D
D5
E
E5
a
b
c
d
12.00m
11.500m
11.500m
11.900
11.500m
11.700
f
11.600
6
D6
11.500m
g
11.400
h
11.300
7
D7
i
D
5
F
F5
d
e
N
0
(S=1/100)
5m

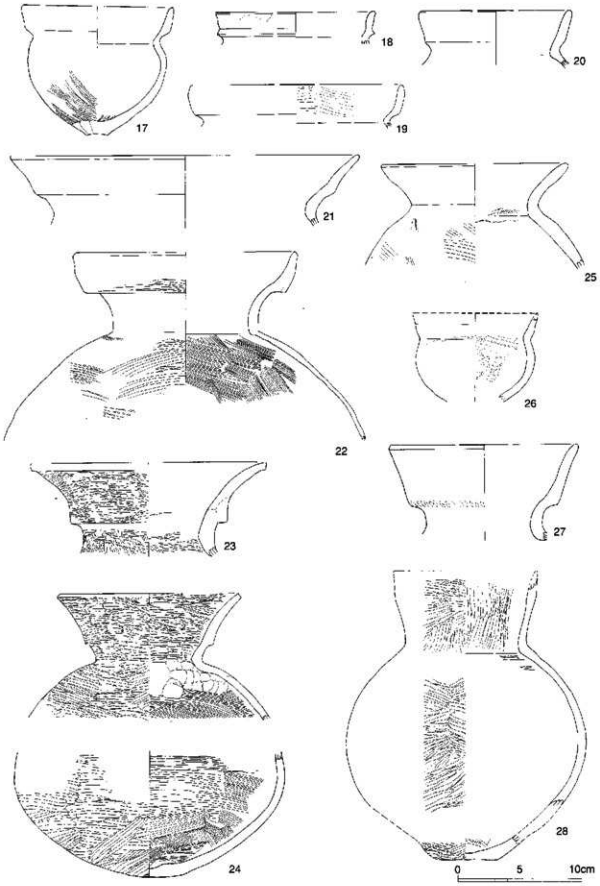
遺跡平面図（1）


D
9
D9
11.650
11.800m
11.750
11.750
11.750
11.750
Ⅲ区
10
11
12
E
E
11.700m
11.700m
11.700m
11.700
11.800
11.900
12.00
12.1
12.200
E12
12.150
12.00
13
14
E13
E14
12.00
11.900
11.800m
11.750
11.750
11.650
11.600
11.600m
11.650
Ⅱ区
N
0
(S=1/100)
5m

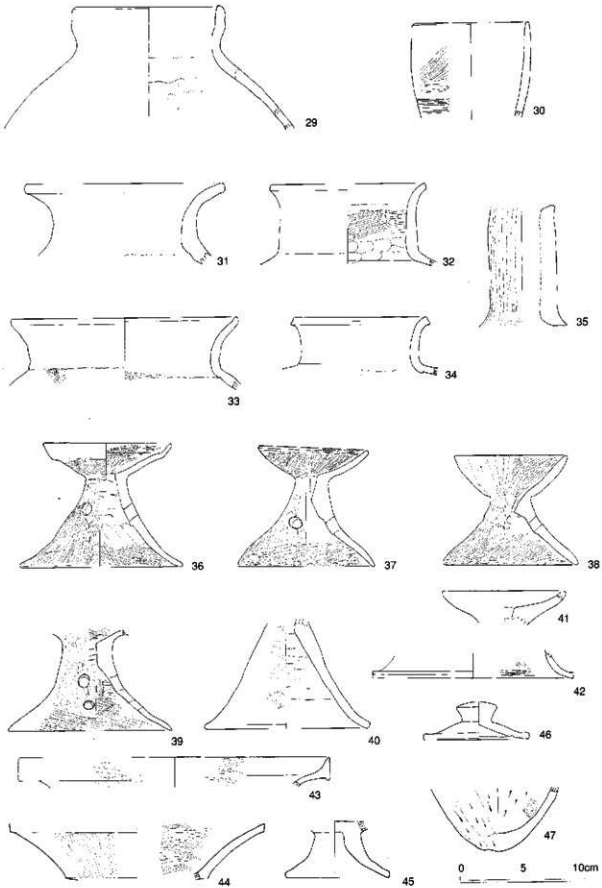
遺跡平面図（2）



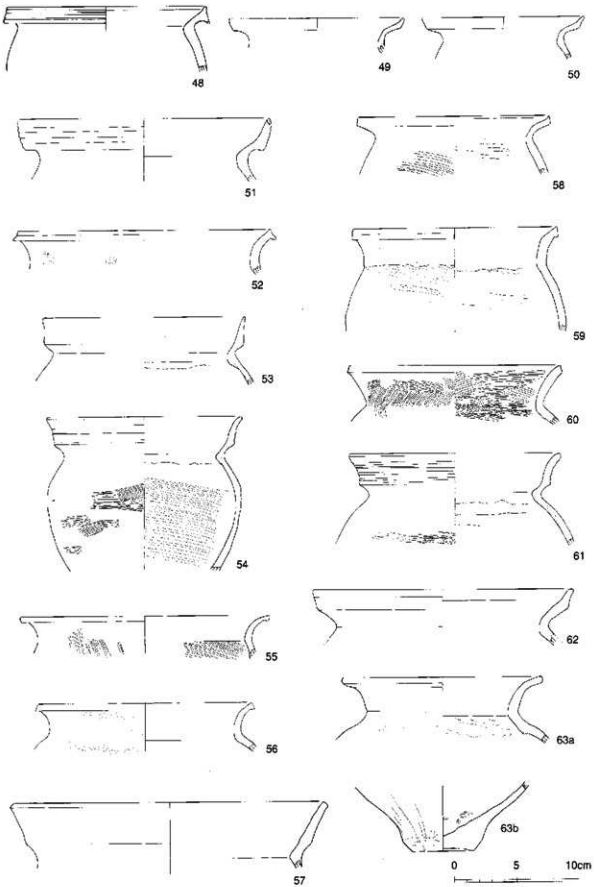
Ⅰ区出土土器実測図（1）



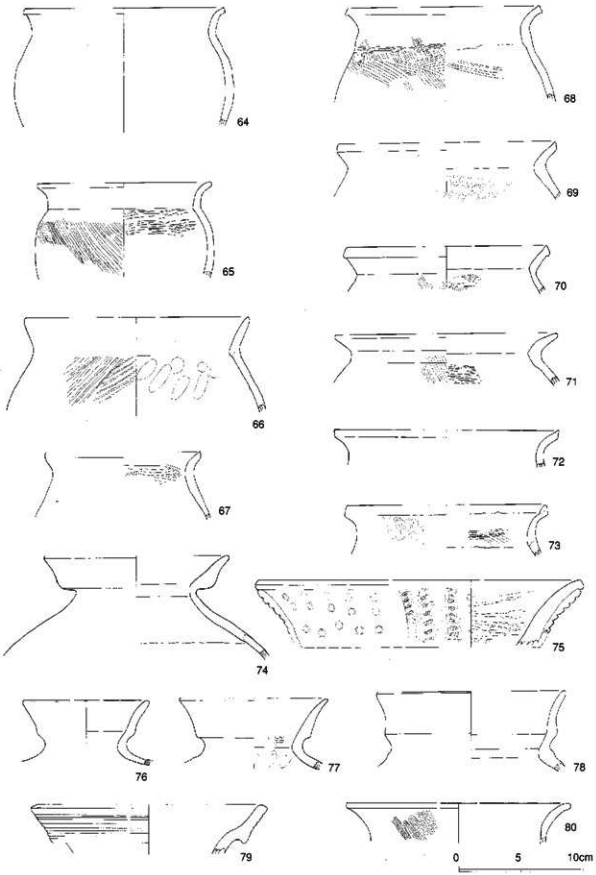
I区出土土器実測図（2）



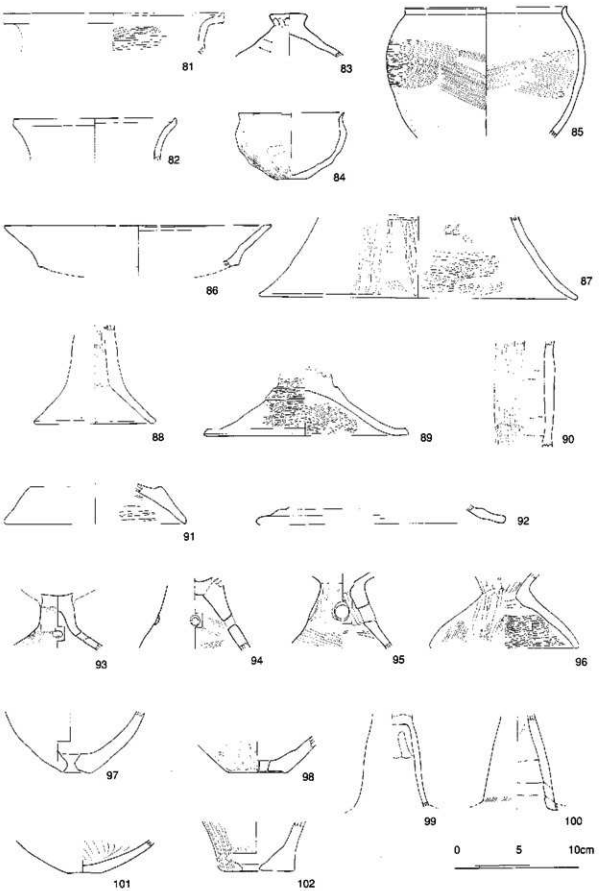
I区出土土器実測図（3）



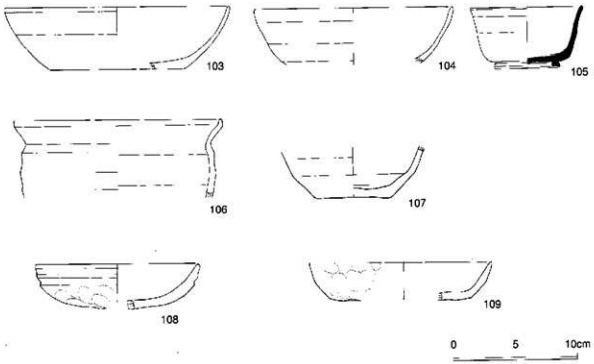
Ⅱ区出土土器実測図（1）



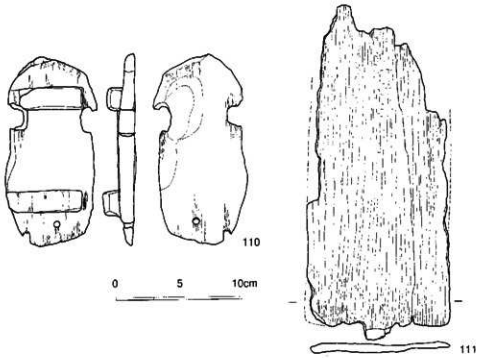
Ⅱ区出土土器実測図（2）


81
83
85
82
84
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
0
5
10cm

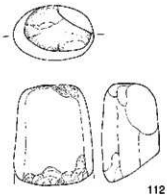
Ⅱ区出土土器実測図（3）

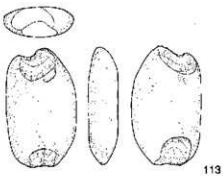


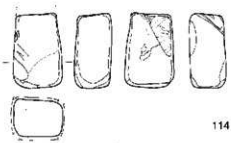
古代中世の土器

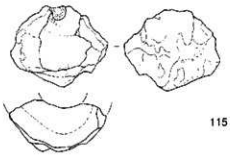


木 製 品









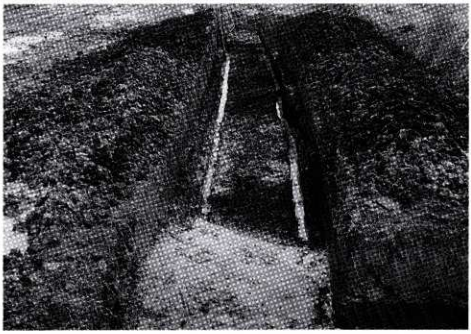
0 5 10cm

石製品・羽口実測図

写 真 図 版

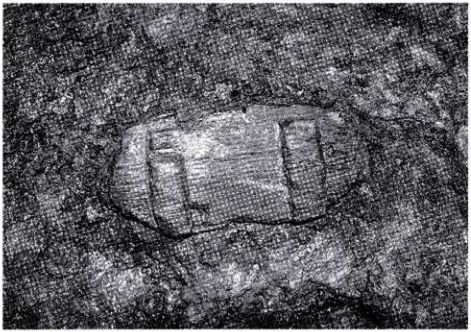
奈良崎遺跡空中写真

Ⅰ区完掘状況（1）

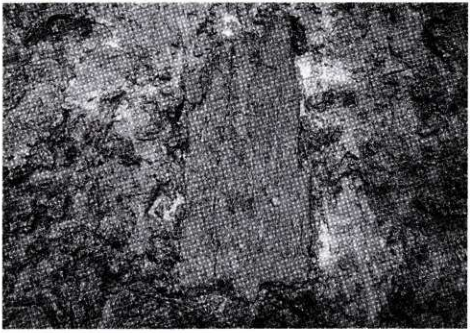


Ⅰ区完掘状況（2）

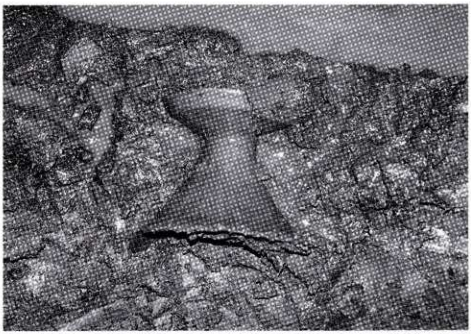
発掘風景



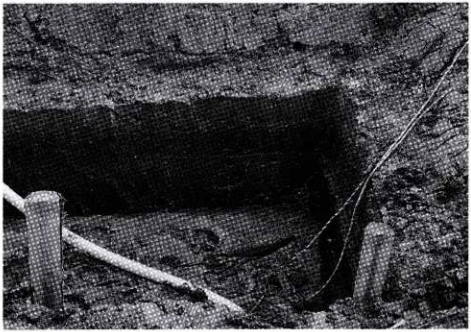
Ⅰ区下駄出土状況



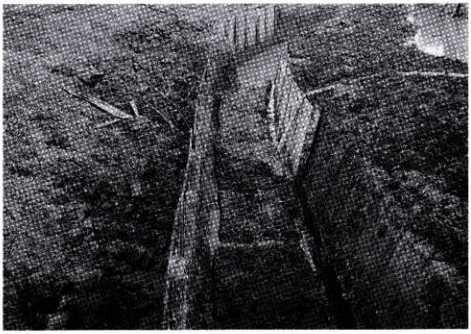
Ⅰ区鋤出土状況



Ⅰ区器台出土状況（36）

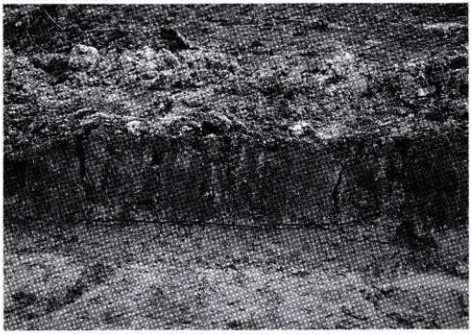


Ⅰ区土層断面

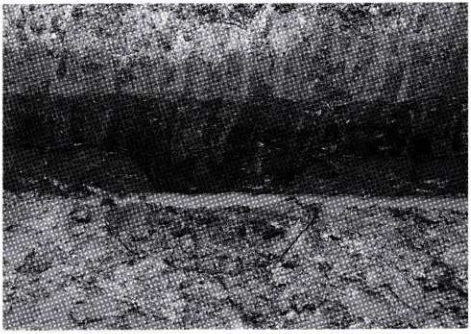


Ⅲ区完掘状況

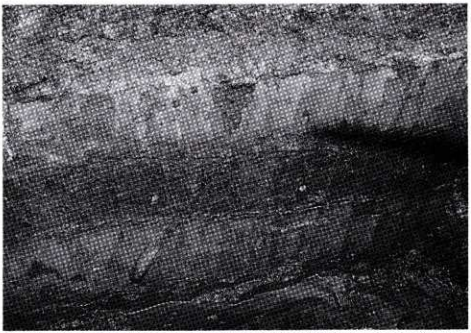
Ⅱ区完掘状況



Ⅱ区土層断面（1）



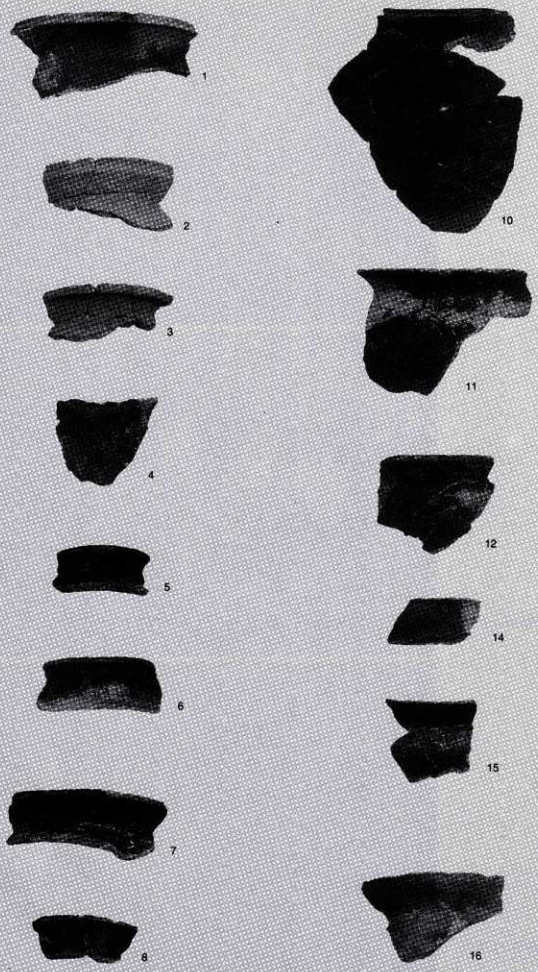
Ⅱ区土層断面（2）



Ⅱ区土層断面（3）

Ⅱ区遺物出土状況

Ⅱ区遺物出土状況



Ⅰ区遺物写真（1）

17

18

21

22

25

27

23

28

24

29

34

31

Ⅰ区遺物写真（2）

36

37

38

39

40

41

45

43

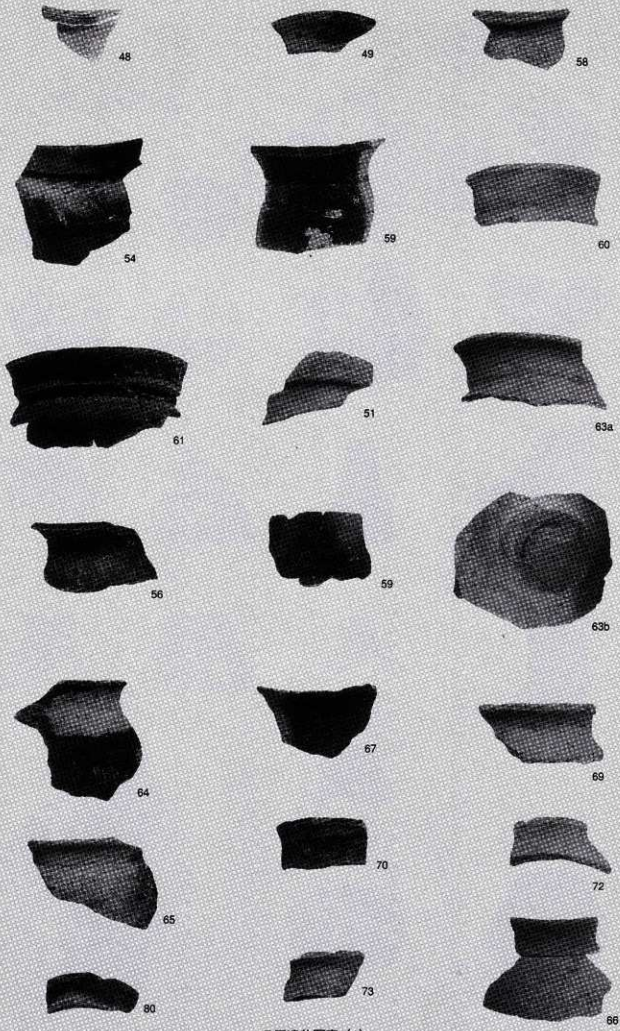
42

44

46

35

I区遺物写真（3）



Ⅱ区遺物写真（1）

74

75

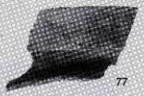
79

76

84

85

83


77

89

88

87

86

90

93

94

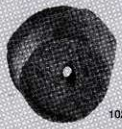
95

98

96

97

101


102

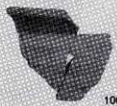
Ⅱ区遺物写真（2）

99

100

104

109


106

107

115

114

112

遺物写真（その他）

報告書抄録

ふりがな	ならさきいせき
書名	奈良崎遺跡
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	丸山　一昭
編集機関	和島村教育委員会
所在地	〒949-4511　新潟県三島郡和島村小島谷3422番地　TEL 0258－74－3111
発行年月日	2001年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
ならさき 奈良崎遺跡	新潟県三島郡和島村大字島崎	1504041	6	37度 35分 28秒	138度 46分 25秒	和島村教育委員会	500㎡	県営圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良崎遺跡	遺物包含地	弥生時代～中世	上坑２基	弥生土器・古式土師器・上師器・羽口・須恵器・中世土師器・石製品・鋤・下駄	

和島村埋蔵文化財調査報告書第10集
県営圃場整備事業（桐島桐原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

奈 良 崎 遺 跡

平成13年３月16日印刷　発行　新潟県和島村教育委員会
平成13年３月19日発行　印刷　㈱第一印刷所
新潟市和合町２丁目４番18号
電話（025）285－7161